

2022 年度実施概要

教育委員会名

気仙沼市教育委員会

採択活動名

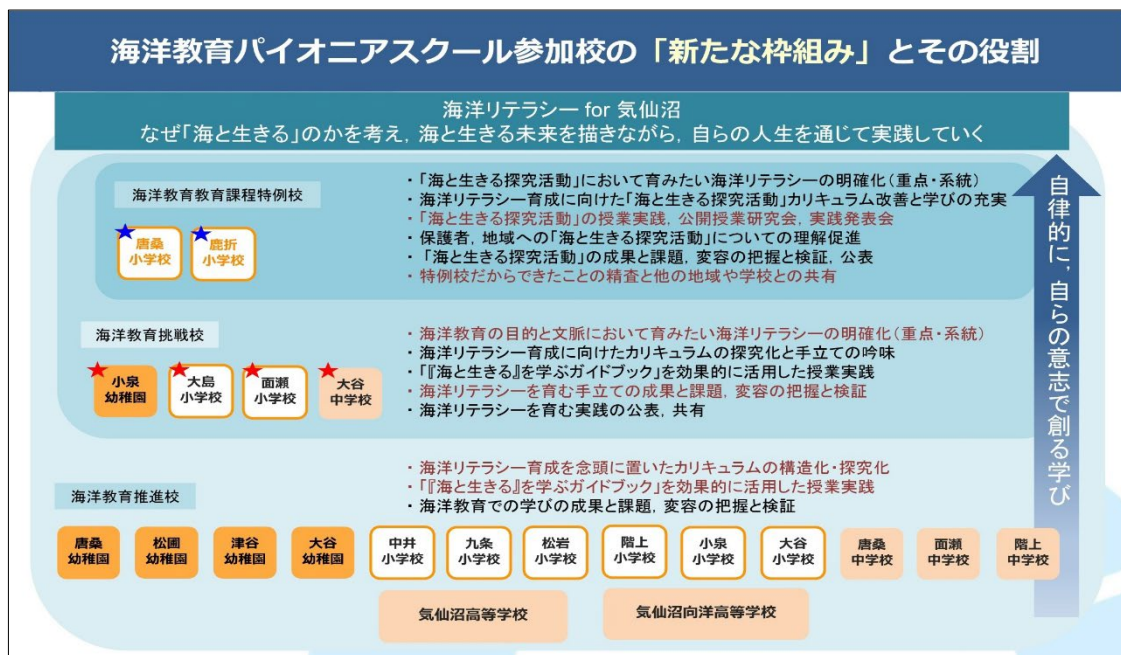
「海と生きる」を学び、地域と共に気仙沼・未来創造力（海洋リテラシーfor 気仙沼を含む）を育む海洋教育

取り組みの概要

1 気仙沼市の海洋教育推進体制と地域版海洋リテラシーに基づくカリキュラム開発と実践

(1) 「海洋リテラシーfor 気仙沼」の理解と普及のための新たな枠組み

昨年度（令和3年度）に地域版海洋リテラシーとして策定した「海洋リテラシーfor 気仙沼」についての各園・校の理解と活用、普及に向けて、海洋教育パイオニアスクールプログラム参加校（幼稚園5園、小学校10校、中学校4校）の枠組みを新たに特例校、挑戦校、推進校の3フェーズ（資料1参照）とした。特例校と挑戦校は「海洋リテラシーfor 気仙沼」を発達段階や地域の実情に応じて育成していくという課題に挑戦的かつ重点的に取り組み、本市海洋教育のねらいに迫る牽引役として、他の推進校やパイオニアスクール参加校以外の学校のモデルとなる取組を推進している。



【資料1：海洋教育パイオニアスクール参加校の「新たな枠組み」とその役割】

(2) 「海洋リテラシーfor 気仙沼」の系統性（幼稚園、小学校、中学校のつながり）

「海洋リテラシーfor 気仙沼」の内容を発達段階に応じてより捉えやすく、扱いやすいものとするために、本市海洋教育推進委員会において幼稚園から中学校までの系統的なつながりを大原則毎に検討し、本年度の案（資料2参照）として仮置きした。具体的には、各園・校の取組の状況を踏まえながら、それぞれの海洋教育全体計画や年間指導カリキュラム、授業案の中に海洋リテラシーを位置付けられるように小項目の内容と文言を吟味した。今後は、この仮置き案を精査し、実践のねらいや方向性、発達段階に応じて育みたい資質能力、活動内容等と海洋リテラシーとの関係性をより明確にするとともに、海洋リテラシーを念頭に置いた実践を通して各園・校の目的や計画等を見直し、児童生徒や教員、地域の変容把握と実践の改善、充実につなげていきたいと考える。

『海洋リテラシー for 気仙沼』の縦のつながり（系統の目安）改訂					
小学校 低学年	<p>a 魚と触れ合い、様々な生き物がいることに気付くことができる。更に足で触れ合ったり調べたりしようとしている。</p> <p>b 海との関わりを喜び、地域の自然の魅力を感ぜようとしている。</p> <p>c 自分たちの強みを守つてくれる海の恵みに感謝しながら、給食を食べている。</p> <p>d 海に関わる仕事がたくさんあることを知り、それらは自分たちの生活になくてはならないものだと感じている。</p>	<p>a 気仙沼の位置を地図上で確かめ、土地の様子を理解している。</p> <p>b なし</p> <p>c 海水の温度によって見られる生き物が変わること、また、現在海水の温度が上昇し開港となっているという事象を具体的に認識している。</p> <p>d.e なし</p> <p>f 陸地には津波がくる可能性があることを防災や学業施設等での体験を通して理解している。</p> <p>g なし</p>	<p>a 気仙沼で水揚げされる魚の種類や量の多さを知り、漁業について興味をもつ。</p> <p>b 自分たちの地域には、どのような漁業、養殖関係の仕事があるのかを知りたい。</p> <p>c 漁業の変化に伴って漁業従事者も変化し、生き物に影響を与えていることを理解している。</p> <p>d まち探検等で、地域の中の海に慣れる人物の人々を探そうとする。</p> <p>e 他人の人も気仙沼で海に関わる仕事をしていることを知り、世界と自分たちの地域がつながり、人々が関わっていることを感じている。</p>	<p>a 昔から伝わる地域の海まつりまつり、お祭りや伝統：獅子舞等、遊歩道を通して海に関する伝統文化を体験し、楽しんでいく。</p> <p>b 過去に起きた地震の災害について知り、災害から命をいかに守るのかについて、自分自身として考えようとしている。</p> <p>c 身の回りに、どのような災害対策の備えがあるのか知り、興味をもっている。</p>	<p>a 現在と昔では地域の様子や生活習慣が変化していることに気付いている。</p> <p>b 漁師の暮らしや人々の生活が海と密接に関わっていることに気付いている。</p> <p>c 地域には海に関わる機軸の変化に気付いている人がいることに気付いている。</p> <p>d なし</p>
小学校 中学年	<p>a 海で遊ぶ体験したり、紙に知っていることを基に語り合ったりしながら、気仙沼の海への関心を広げている。</p> <p>b 海の恵みにはどのようなものがあるのかについて語り合い、海に対する思いを絵や文章で表現している。</p>	<p>a 気仙沼の位置を地図上で確かめ、土地の様子を理解している。</p> <p>b なし</p> <p>c 海水の温度によって見られる生き物が変わること、また、現在海水の温度が上昇し開港となっているという事象を具体的に認識している。</p> <p>d.e なし</p> <p>f 陸地には津波がくる可能性があることを防災や学業施設等での体験を通して理解している。</p> <p>g なし</p>	<p>a 気仙沼で水揚げされる魚の種類や量の多さを知り、漁業について興味をもつ。</p> <p>b 自分たちの地域には、どのような漁業、養殖関係の仕事があるのかを知りたい。</p> <p>c 漁業の変化に伴って漁業従事者も変化し、生き物に影響を与えていることを理解している。</p> <p>d まち探検等で、地域の中の海に慣れる人物の人々を探そうとする。</p> <p>e 他人の人も気仙沼で海に関わる仕事をしていることを知り、世界と自分たちの地域がつながり、人々が関わっていることを感じている。</p>	<p>a 昔から伝わる地域の海まつりまつり、お祭りや伝統：獅子舞等、遊歩道を通して海に関する伝統文化を体験し、楽しんでいく。</p> <p>b 過去に起きた地震の災害について知り、災害から命をいかに守るのかについて、自分自身として考えようとしている。</p> <p>c 身の回りに、どのような災害対策の備えがあるのか知り、興味をもっている。</p>	<p>a 現在と昔では地域の様子や生活習慣が変化していることに気付いている。</p> <p>b 漁師の暮らしや人々の生活が海と密接に関わっていることに気付いている。</p> <p>c 地域には海に関わる機軸の変化に気付いている人がいることに気付いている。</p> <p>d なし</p>

【資料 2：『海洋リテラシー for 気仙沼』の縦のつながり（系統の目安）R4 仮置き】

2 「海洋リテラシー for 気仙沼」に基づくカリキュラム開発と、海洋教育副読本『海と生きる』を学ぶガイドブック～未来をえがくわたしたち～活用による実践

昨年度（令和 3 年度）に作成した海洋教育副読本『海と生きる』を学ぶガイドブックは、「海洋リテラシー for 気仙沼」と一体的で双方向的な構成となっており、副読本を効果的に活用することが海洋リテラシーを育むことにつながる。海洋教育推進校、挑戦校、特例校のいずれにおいても副読本を教科等で積極的に活用し、児童生徒の体験活動や「問い」への導きによる探究的な学びの深まり、地域での貢献活動などの事例が多く見受けられた。また、市海洋教育推進委員が副読本の活用例としてそれぞれ所属する幼稚園、小・中学校において先行して実践したモデル事例集を作成し、市内全ての海洋教育パイオニアスクールが参加する市海洋教育推進連絡会において活用事例（資料 3 参照）として紹介し学び合った。本年度の各園・校からの実践報告にも活用実践が複数示されていた。

気仙沼市海洋教育副読本（『海と生きる』を学ぶガイドブック～未来をえがくわたしたち～）活用実践記録 【断折小学校】				
学年	単元名（教科・領域）	単元のねらい	既存の授業実践と副読本との接続の発見	
5 年	気仙沼の水産業を調べよう①（海と生きる探究活動）	○気仙沼の水産業の特色について理解を深め、「海とのつながり（環境・伝統・産業・国際問題）」について考えることができる。	気仙沼市の水産業について調べるために、魚市場、まぐろ延縄船、造船所見学を実施した。全国でも有数の水産関連企業が集まるまぐろの特色について理解を深めるために副読本を活用し、造船業者の他業種との関連付けを図る共に、企業や人々が抱える課題の比較を行った。	
展開	<p>主な学習活動</p> <p>1 気仙沼と海とのつながりについて考える</p> <p>2 気仙沼の水産業を調べるための計画を立てる</p> <p>(1) 探究課題の設定</p>	<p>活用の仕方/活用上の留意点</p> <p>○学びの導入「なぜ『海と生きる』なのだろうか？」を音読し、気仙沼の人々が大切にしていた『海とのつながり』について考えさせる。</p> <p>○探究のスパイラルのイメージを児童と共有し、探究課題の設定を行う。</p>	<p>副読本活用のねらい・効果</p> <p>○気仙沼の人々が大切に守ってきた漁業や伝統、文化などの『海とのつながり』のイメージを共有する。</p> <p>○探究的な学習について確認し、校外学習や体験で浮かび上がる疑問や気付きを手掛かりに活動を進めていく。</p>	<p>活用する内容・機能・ページ</p> <p>○「なぜ『海と生きる』なのだろうか？」（4 ページ）</p> <p>○この副読本を通し、深く考えるために（5 ページ）</p>
展開 (探究)	<p>3 魚市場を調べる</p> <p>(1) 見学で調べることを整理する</p> <p>(2) 魚市場・海の市見学を行う</p> <p>4 漁船について調べよう</p> <p>(1) まぐろ延縄船見学を行う</p> <p>(2) みらい造船所の見学を行う</p> <p>5 調べたことを整理しよう</p>	<p>○海をいかに『海と生きる』は、どのような仕事をしているの？と「他には海に関わるどんな仕事があるの？」を音読し、活動の中で学ぶ、「漁業（とる）で働く人の仕事と悪い」「多様な仕事を調べ、互いのつながりを見よう」への意識付けを行う。</p> <p>○魚市場、まぐろ延縄船見学を実施する前に「ポイント」を参考にしながら、質問を考えさせたり、事前に調べさせたりして、課題意識をもたせる。</p> <p>○図表「気仙沼の海に関わる仕事・産業のひろがり」を活用し、個人の探究活動の中でさらに調べ、見つけた課題等を比較したい事象や会社へと考えを広げる。</p>	<p>○校外学習を実施する前に、副読本のワークやポイントを活用することで、課題意識をもたせることができる。見学や講話を通して、新しい疑問に気付けたり、まとめや発信の見直しをもたせたりすることができる。</p> <p>○校外学習後に学級で気付いたことを整理する時には、副読本の図表を活用するとよい。見学した事象の価値付け・発信をするだけでなく、次の活動につながる気付きを整理することができる。</p>	<p>○「気仙沼では、どんな魚がとれるの？何を食べているの？」（2,4 ページ）</p> <p>○「海で働く人は、どんな仕事をしているの？」（2,7 ページ）</p> <p>○「他には海に関わるどんな仕事があるの？」（3,1 ページ）</p> <p>○図表「気仙沼の海に関わる仕事・産業のひろがり」（3,2 ページ）</p>
まとめ (深化・発展)	<p>6 調べたことを発表しよう</p> <p>(1) 探究課題を整理する</p> <p>(2) 発表会をしよう</p>	<p>○個人探究課題に合わせて、副読本を活用しながら、漁業と環境や国際問題について考えさせる。</p> <p>①環境と「地球温暖化の海への影響」20 ページ</p> <p>②国際と「近頃の漁場・遠くの漁場」2,8 ページ</p>	<p>○個人の探究課題について確認する活動の中で、副読本を活用することができる。タブレット端末で、各々が環境や国際問題等のページから漁業とのつながりについて発展的に学んだことを整理することができる。</p>	<p>○「地球温暖化の海への影響」（2,6 ページ）</p> <p>○「近頃の漁場・遠くの漁場」（2,8 ページ）</p>

実践を振り返って

昨年度までの実践では、魚市場やまぐろ延縄船等の見学を行った際に、児童の学びに深まりが足りなかった。見学を通して気付いたことを児童に表現させたときには、指導者が意図する探究的な方向性と違い、表面的なものに終わってしまうことが多かった。今年度、副読本を活用して指導を行ったことで、児童に見学する上での視点を意識させることができ、より深い気付きを引き出すことができた。特に今回の指導では、『海洋リテラシー for 気仙沼』における「C 海の仕組みを知る」と「D 海をいかに」に関して、副読本は有効だった。児童は自分の気付きをもとに、世界に視野を広げたり、環境問題に視野を向けたりと、さらに探究的な学びを進めることができている。今後も、児童がさらに多面的な見方、考え方ができるように副読本を活用していきたい。

【資料 3：『海と生きる』を学ぶガイドブック活用実践記録（特例校小学校高学年の例）】

3 海洋教育のさらなる展開に向けて

(1) 公開授業研究会や成果発表会の実施

① 市立幼稚園 5 園連携による「海洋教育こどもサミット in 小泉海岸」の実施

本年度市立幼稚園の 5 園全てが海洋教育パイオニアスクールに参加し、昨年度に続いて 2 回目となる幼稚園連携による海での交流会（幼稚園こどもサミット）を実施した。海をフィールドに、海に出会い、海に親しみ、他園の友達と触れ合いながら、五感を活用して楽しく遊ぶことをねらいに行っている活動である（資料 4 参照）。それぞれの園では、事前に互いにオンラインで紹介し合ったり、事後に東京大学海洋教育センターの特任研究員にオンラインで質問したりするなど ICT も積極的に活用した。来年度は年 2 回、環境が異なる海での交流活動を計画している。



【資料 4：幼稚園連携での海のサミット】

② 海洋教育特例校・挑戦校による公開授業研究会と成果発表会 z

海洋教育特例校 2 校（鹿折小・唐桑小）では、特設の領域「海と生きる探究活動」の公開授業を実施（資料 5 参照）し、海洋教育パイオニアスクールを含む市内幼稚園、小中学校の教員が教科等との横断による探究的な学習の一端を発信・参観した。海洋教育挑戦園（小泉幼）では、幼児教育に携わる教員や保育士、小学校教員等を対象に、海洋教育に関する教育活動の一端を広く公開した。同じく挑戦校 2 校（大島小・面瀬小）でも探究的な学習としての授業を公開した。また、特例校 2 校（鹿折小・唐桑小）と挑戦校 1 校（大島小）では、「海と生きる」学びの 1 年間の成果を、フォーラムやサミット、発表会の形で保護者や地域、企業、大学関係者等を招待してポスターセッション形式で発表し、交流を深める様子を広く発信し普及に努めた。



【資料 5：海洋教育での公開授業研究会】

(2) 地域・国を超える学び合い等の実施

毎年度、東北地域で海洋教育に取り組んでいる小・中・高校が一堂に会して開催している「海洋教育こどもサミット」を、本年度は気仙沼市教育委員会が主催となって開催した。気仙沼市、洋野町、只見町に加え、鶴岡市も初参加し 32 校による実践発表・交流と、「未来で海と生きるために必要なことは何だろう」をテーマに学びの深め合いを行った。中学生が進行、高校生がファシリテーターを務めるという画期的なサミットを通じて、それぞれの地域の海の姿を切り口にしながらも温暖化や海洋ごみ等、地球的視野で多面的・多角的に学び合うことができていた。また、特例校 1 校（鹿折小）では、地球温暖化による気候変動を共通テーマに、3～6 年生児童が、文化、水、産業、食、未来などについての学習経緯を紹介し合いながら、キリバス共和国の War Memorial 小学校とオンライン交流を行った（資料 6 参照）。昨年度から始まった国際海洋教育交流として来年度以降も継続する予定である。



【資料 6：キリバスとの学習交流】

(3) 教員研修会 (他地域を含む) の実施

本市の海洋教育パイオニアスクールプログラム参加校に県立高校 2 校が加わり、年間 5 回開催している海洋教育推進連絡会において、本年度は以下の研修講話と実践事例の発表、情報交換等による教員研修会を開催した。これらの一部を、洋野町、只見町、鶴岡市など海洋教育を推進している他地域ともオンラインによる教員での学び合いとして実施した。毎回、東京大学海洋教育センターや海洋政策研究所などの研究者、地元気仙沼の企業や行政関係者等から、本市の海洋教育の在り方や各園・校の実践について指導助言(資料 7 参照)を得ている。



【資料 7: 連絡会での学び合い】

【2022 (令和 4) 年度 気仙沼市海洋教育推進連絡会 (年 5 回開催) での研修講話】

- 第 1 回 「海洋教育のビジョン」 東京大学海洋教育センター 教授 田中智志 氏
- 第 2 回 「海洋酸性化のはなし」 東京海洋大学学術研究院 准教授 川合美千代 氏
- 第 3 回 「我が国の小学校における海洋教育現場の課題～実践報告のテキストマイニングによる分析結果～」 笹川平和財団海洋政策研究所 研究員 小熊幸子 氏
- 第 4 回 「100 年先を見据え、みらい造船が描く未来と私が描く夢」 (株) みらい造船 広報担当 梶原美羽 氏
- 第 5 回 「海洋教育と道徳教育～海洋リテラシー for 気仙沼と道徳科のつながり～」 東京大学海洋教育センター/みなとラボ 特任研究員 梶川 萌 氏

(4) 地域・保護者への海洋教育の発信と普及

前述した海洋教育に関する公開研究会や成果発表会、海洋教育こどもサミットの視聴などを通して、保護者や地域、市民等への発信と普及に努めた。この他にも各園・校では、海洋教育に関する取組の様子をリーフレットやポスター、冊子などにまとめた成果物を家庭や地域、企業などに広く配布し普及に努めている。また、特例校(鹿折小)や挑戦園(小泉幼)など、海洋教育に対する保護者の意識について学校アンケート(資料 8 参照)などで把握している園や学校も複数ある。

ESD, 海洋教育に関する保護者アンケート結果				
気仙沼市立鹿折小学校				
■アンケート調査の方法・令和 5 年 1 月 12 日(木)～20 日(金)の期間・Web アンケートで実施 回答数:保護者 99 名(回答率 約 55%)				
Q1 あなたは、気仙沼市が進めている海洋教育について、学校が取り組んでいることを知っていますか。				
	とても	まあまあ	あまり	全く
全体	31%	58%	11%	0%
低学年	27%	54%	19%	0%
中学年	30%	64%	6%	0%
高学年	36%	56%	8%	0%
<small><考察> 全体として、9 割近くの保護者が海洋教育について理解しており、特例校として継続的に取り組んでいる成果が表れている。低学年保護者にも生活科の学習を通して海洋教育に取り組んでいることを浸透させることも必要である。</small>				
Q2 あなたは、学校で取り組んでいる ESD (持続可能な開発のための教育) の取組について知っていますか。				
	とても	まあまあ	あまり	全く
全体	14%	59%	26%	1%
低学年	19%	50%	27%	4%
中学年	16%	53%	31%	0%
高学年	10%	72%	18%	0%
<small><考察> 学年が上がるとともに、保護者の認知度が上がるが、全体として海洋教育に出入り、認知度が低い ESD や SDGs の観点で取組活動に取り組んでいることも伝えていく必要がある。</small>				
Q3 あなたは、お子さんが学校で行っている地域の学習(生活科、海と生きる探究活動)についてお子さんの取組を知っていますか。				
	とても	まあまあ	あまり	全く
全体	27%	58%	15%	0%
低学年	19%	58%	23%	0%
中学年	33%	58%	9%	0%
高学年	28%	59%	13%	0%
<small><考察> 全体として 8 割を超える認知度であるが、中学年が特に高い割合であった。中学年は天童や鹿折小など地域で活動していることが要因と思われる。地域とつながりのある学習を行うこと、取組を紹介することを行っていることが重要である。</small>				
Q4 あなたは、海洋教育がお子さんの学力向上や地域の理解につながっていると思いますか。				
	とても	まあまあ	あまり	全く
全体	28%	57%	6%	9%
低学年	35%	46%	15%	0%
中学年	24%	67%	3%	6%
高学年	28%	56%	3%	13%
<small><考察> 学年が上がるとともに、学習内容が難しくなることもあるため、「分からない」と回答する割合が高くなっているが、全体として 8 割を超える保護者が学力向上、地域の理解につながっていると感じている。</small>				
Q5 あなたは、ESD の取組がお子さんの学力向上や地域の理解につながっていると思いますか。				
	とても	まあまあ	あまり	全く
全体	21%	65%	5%	9%
低学年	27%	58%	8%	8%
中学年	18%	70%	6%	6%
高学年	21%	67%	3%	10%
<small><考察> 海洋教育同様、8 割を超える保護者が学力向上、地域の理解につながっていると感じている。</small>				
Q6 海洋リテラシー(活用する能力)について、お子さんができている(身に付いている)と思うものにチェックしてください(いくつでもかまいません)。				
リテラシー項目	全体	低学年	中学年	高学年
気仙沼の海に触れ、実際に海を体験する	68%	88%	64%	59%
海の生き物の生命がつながっていることを知る	56%	54%	58%	54%
海が生命を育んでいること、海と生命が直接的・間接的につながっていることを知る	36%	19%	42%	44%
海は「食」を通じて私たちの生命を維持していることを知る	60%	46%	67%	64%
海の生き物は消費・経済活動を支えていることを理解する	25%	8%	15%	46%
地域の地理的特徴に対して、海がもたらした影響を理解する	20%	8%	18%	31%
外洋や海流の仕組みを理解する	13%	4%	3%	28%
地球温暖化と海水の関係を理解する	36%	12%	33%	56%
地域の漁業や養殖業の歴史や文化、技術を尊重する	28%	4%	30%	44%
海が地域にもたらした災害と復興の歴史を知る	36%	38%	27%	44%
海と生きるまちづくりについて知る	34%	19%	36%	44%
<small><考察> 学年が上がるとともに身に付いていると回答する割合が高くなっている。全学年で身に付いている割合が高い項目は「海を体験する」「生命のつながり」「食を通じて生命維持」である。体験を通して学習している本校の取組が理解されていることや日常生活からこれらのリテラシーが身に付いていると考えられると思われる。</small>				
Q7 海洋リテラシー(活用する能力)について、お子さんに身に付けさせたいと思うものにチェックしてください(いくつでもかまいません)。				
リテラシー項目	全体	低学年	中学年	高学年
気仙沼の海に触れ、実際に海を体験する	57%	65%	42%	62%
海の生き物の生命がつながっていることを知る	39%	50%	30%	41%
海が生命を育んでいること、海と生命が直接的・間接的につながっていることを知る	49%	54%	39%	56%
海は「食」を通じて私たちの生命を維持していることを知る	52%	58%	45%	54%
海の生き物は消費・経済活動を支えていることを理解する	40%	50%	33%	41%
地域の地理的特徴に対して、海がもたらした影響を理解する	38%	31%	39%	44%
外洋や海流の仕組みを理解する	28%	15%	27%	38%
地球温暖化と海水の関係を理解する	46%	38%	48%	51%
地域の漁業や養殖業の歴史や文化、技術を尊重する	33%	27%	33%	38%
海が地域にもたらした災害と復興の歴史を知る	48%	58%	42%	49%
海と生きるまちづくりについて知る	49%	50%	48%	51%
<small><考察> 全学年で身に付けさせたいと回答する割合が高いリテラシーとして「海を体験する」「食を通じて生命維持」が挙げられる。今後も体験活動を通して学習や給食の時間に地域の食材を紹介するなど行っていくことが重要である。また、「海と生きるまちづくり」の割合も高く、将来気仙沼を背負い人材を育成する観点でも取り入れていくことが必要である。</small>				
<海洋教育や ESD の取組、海と生きる探究活動についての意見>				
<small>・海が町に与えてきた影響(良いも悪いも)や今後どのようにして海と付き合っていくか、そして新たな海の活用方法(エネルギー開発や産業など)を考える機会もあるように、 ・とても素晴らしい取組だと思っておりますので、子供たちのためにも今後も続けてほしいと思っております。 ・子供たちが楽しめる仕組みを取り入れて、学びに繋げていけたらいいと思います。</small>				

【資料 8 : 2022 (令和 4) 年度 海洋教育に関する保護者アンケート結果 (意識調査) の例】

(5) 全市的な展開

「海と生きる」を震災復興キャッチフレーズに掲げる本市では、関係諸機関・団体等が連携協働して「海洋プラスチックごみ対策アクションプラン」を推進している。また、市民の理解と協力を得て、本市のSDGs達成を目指す組織として「仮称：気仙沼市持続可能な社会推進市民会議（通称：サステナ市民会議）がまもなく立ち上がる。市教育委員会では、高校生を中心に地元企業と連携した「気仙沼 学びの産官学コンソーシアム」も動き出している。海洋教育パイオニアスクールプログラムとして、幼・小・中学校において体系的・探究的に継続している海洋養育の成果を生かしつつ、これらの大人やユースの取組と関連させながら、全市的な取組へと展開し発展させていきたいと考えている。

活動参加校名

1. 気仙沼市立唐桑幼稚園
2. 気仙馬市立松圃幼稚園
3. 気仙沼市立津谷幼稚園
4. 気仙沼市立小泉幼稚園（挑戦園）
5. 気仙沼市立大谷幼稚園
6. 気仙沼市立九条小学校
7. 気仙沼市立鹿折小学校（特例校）
8. 気仙沼市立松岩小学校
9. 気仙沼市立階上小学校
10. 気仙沼市立大島小学校（挑戦校）
11. 気仙沼市立面瀬小学校（挑戦校）
12. 気仙沼市立唐桑小学校（特例校）
13. 気仙沼市立中井小学校
14. 気仙沼市立小泉小学校
15. 気仙沼市立大谷小学校
16. 気仙沼市立階上中学校
17. 気仙沼市立面瀬中学校
18. 気仙沼市立唐桑中学校
19. 気仙沼市立大谷中学校（挑戦校）